

短編集5
ガソリン

久野那美

目次

おしまいの星	- 3 -
天使が通る	- 10 -
あの時の恋	- 26 -
ラジオ	- 38 -
約束	- 47 -
靴 2002	- 54 -
ガソリン	- 60 -

おしほの星

登場するもの：男

女

永い眠りから覚めた星。
ブルドーザーが、土の中から、埋まった町を掘り起こしている。
大勢の作業員や調査員があちこちで仕事をしている。
携帯電話の音。ブルドーザーの音。クレーンの音。機械音。

男 そっちどう？はかどってる？

女 うん・・・

男 空気は薄くない。風も吹いている・・・

女 ・・・・

男 地面もすっかり溶けてるよ。地面も空気も適温だ。

女 ・・・・

男 水もたっぷりある。

女 ・・・・

男 すっかり生き返ったね。

女 ・・・・

男 ずいぶん永い間眠ってたんだな。

女 ・そうみたいね。

男 暮らしやすい星だったんだろうな。

女 ・・・・

男 何？どうしたの？

女 うん・・・

男 変な顔して。

女 変なのよ。

男 え？そんなダイレクトに・・・

女 ・・・・なんだか、変なのよ。

男 ・・・・は？

女 ・・・・どうして・・・

男 何が変なの？

女 この星。

男 この星は変だよ。変だから調べてるんだろ。これから何が出てくるか・・・
女 だから・・・

男 もっと具体的にどうぞ。はい。

女 ……。たとえば、

男 たとえば？

女 ……向こうの山の西半分。途中まで植林した跡がある…。

男 何の木？

女 知らないわよ。そうじゃなくて…。

男 生物学にも興味あったの？

女 うーん。そうじゃなくて…。あ。そうだ。これ。これ見て。先月ここで…

ポケットから一冊のノートを取り出す。

男 何？日記？「3月8日金曜日。晴れ。晴天だ。きのうはほんとうにラッキーだった。あれはきつと運命の出会いだ。遅刻したからこそだ。入学式に遅刻なんてしくじったと思ったけど、寝坊してほんとうによかった。寝坊したのはそもそも…」

女 その説明に2ページあるけど先に進んで。

男 え？そう？ほんとだ。(ページをめくる)

「…なのに変なミスをしてしまった。あの子の電話番号をどこに書いたん

だっけ…。どうしても思い出せない。ああ。どうしよう。あの子はぼくの番号をしらない…

家もクラスもわからない。今日は朝から憂鬱だ。こんなに天気がいいのに。昨日はあんなおおあめだったのに…。」ありゃ。終わってるよ。ここで。 (ページをめくる。最後まで真っ白。)

女 ね。

男 何？

女 ちゃんと終わってないでしょ。文が。

男 文の下手な奴ってどこの星にもいるんだよ。はじめたことが途中で嫌になる奴も。

女 そうじゃなくて…。そもそもいったいどうしてそんなこと書くのよ。

男 何書いたっていいじゃない。日記なんだから。

女 だって…。おしまいの日に？

男 あ…。そうか。(日付を確認する) だから続きがないのか。

女 この星の寿命はずっと前からわかってたんでしょ。

おしまいの日を迎えたひとたちはみんな、生まれたときから何もかも分かってたんでしょ？

男 ひいおじいちゃんの代からね。
女 だったら・・・どうして？どうしてこの星のどこを探しても「おしまい」の跡がどこにもみつからないの？

男 この星は確かに終わったよ。10000年前の3月8日に。

女 ・・・・

男 そのあとここは氷の下に埋まってしまった。

女 だったらどうして？

みんな、中途半端なの。何にもちゃんと終わってない。

地面の下から出てくるものがみんな「なにかの途中。」

この先まだ続きがあると思えない。

どうして・・・。

男 何かの途中・・・。

女 どうして電話番号を聞くのよ？卒業式ならともかくどうして入学式なのよ？

男 (ぱらぱらと日記をめくる)

女 しかもそれ、10年日記。

男 どこの星にもおんなじこと考える奴がいるんだな。

女 ・・・・どうして木を植えるのよ？

男 ・・・・おしまいの日には、じゃあ、どうすればいいの。

女 ・・・・。

男 大掃除して、酒飲んでそば食って鐘聞くのか？

女 ・・・・。

しばらく。女は何か考えている。

男 君だったら何をした？

女 私？私は・・・

男 ・・・・何をどうやっても、絶対に避けられないことも3代前から分かってたら。

女 ・・・・。

しばらく・・・。

女 ・・・・戻ってくるつもりだったのかしら。

男 どこから？
 女 どこって・・・
 男 あああああーっ！
 女 え？何？
 男 ここだよ。
 女 え？
 男 この日記のほら、裏表紙。
 女 ・・・・
 男 こいつ馬鹿だなあ。ここに書いたんだよ。
 女 ・・・・
 男 電話・・・したのかなあ。結局。
 女 ・・・・電話・・・。

携帯電話の音。ブルドーザーの音。クレーンの音。機械音。
 発掘調査は続いている。
 地面の下からは次々と、おしまいになった過去が掘り起こされていく。
 中途半端に終わっている過去の数々。
 ずうっと昔。宇宙の隅っこでひっそりとおしまいになった星で。

天使が通る

登場するもの 天使たち
 墮天使
 少年
 少女
 右の靴
 左の靴
 世界

0. 序章

0. 雑踏
 地面に二足の靴。
 行き交うひとの波。言葉の波。
 気づけば手から手へ、小さな灯りが手わたされていく。
 手渡された少年。
 次に渡す相手がいらないことに気づいて、ひとりそこから遠ざかる。
 ふと会話が止み、静寂が訪れる。

2. 屋上

少年 (とにかく続きを読む) 第7章地上。殺風景なビルの上。

天使が……落ちてくる。 ひゅうっ、どすん。

少女 こんばんは。

少女、落ちてきた天使をちらっと見る。さほど驚いた風もなく……手には靴を持って
いる。

堕天使 あ……。

少女 風、止みましたね。(空を見ている。)

堕天使 ……。

少女 ほんとに手回しがいいですね。

堕天使 ……。

少女 地下には葬儀屋さん、屋上には天使さん。

堕天使 葬儀屋？誰か、亡くなったんですか？

少女 まだです！

堕天使 ……？

少女 でも……。

堕天使 いいんですか？こんなところにいて……。

少女 あたしは、家族じゃないから。

堕天使 ……？

少女 彼のご両親とお姉さんが、今お医者様と話しています。 ……脳が死んでしまったんですって。

堕天使 ? (よくわからない。天使には医学の知識がないのだ。)

少女 だけど、彼は、まだ生きてます。

堕天使 はい。

少女 だけど、今だったら、誰かに譲ってあげることができてるんですって。 でもそのためには、今、おしまいにしなくちゃいけないんですって。

堕天使 はあ。

少女 わかります？

堕天使 ……すみません。よく……わかりません。

少女 わたしも。

間

少女 歩くのが好きな人でね。「遠くへ、行きたい」って、いつも言ってる。

堕天使 とおく？

少女 ええ。

堕天使 ……

少女 どこへ行きかけたんだろ。

堕天使 ……

少女 どこへ行く途中だったんだろ。

間

堕天使 もうすぐ、とोकへ行くことができますよ。

少女 彼は天国へ連れていかれるの？

堕天使 はい。たぶん。

少女 天国は天の上にあるのよね？

間

堕天使 はい。

少女 遠い？

堕天使 はい。とても。

少女 でも、歩いていくことはできないのよね。

堕天使 できません。

堕天使 あの…。たぶん…勘違いされてると思うんですけど、あなたの彼を天国へ連れて行くのは僕の役目じゃありません。別の天使がもうすぐここへ来るんだろうと思います。

少女 え———？！じゃあ、あなたここで何してるの？

堕天使 僕は、もう、天使の仕事をするのができないんです。こんな破れた羽では天へ昇ることはできません。

少女 あなたも…死ぬの？

堕天使 いいえ。僕は天使ですから、死ぬことはできません。

少女 じゃあ、転職するの？

少女 履いて。

天使、おそろおそろ靴を履いてみる…

少女 …そのファッションは意外と靴を選ばないのね。なぜか、サイズもちょうどいいし。

堕天使 天使にはサイズがありません。

少女 便利ね。

堕天使 まあ…。

少女 ね、これで歩けるでしょ。

堕天使 でも、天使が歩いて、どこへ行くんでしょう？

少女 どこへでも行けるじゃない。

堕天使 天の上へは行けません。

少女 いいじゃない。地面を歩けば。

堕天使 でも…

天使はしばらく何か考えている。

間

少女 遠くまで行けるかな？

堕天使 とおく？

少女 行ってきてくれない？

堕天使 …

少女 その…歩かない方の天使が来る前に。

天使、一歩づつ、確かめるように道を歩き始める。少女はそれを見送っている。

いつまでも、見送っている…。

堕天使 もらった靴を履いて、僕は歩いた。

あれからどれだけの時間が過ぎたろう。僕は歩き続けた。

砂の上に、雪の上に、アスファルトの上に足跡を残して。

地球はまるいので、どこまでもどこまでも歩き続けることができた。

僕の姿は陽炎のようににはかなくて、風景の中に紛れてしまう。

僕の足音はとても小さくて、かすかな音にも消されてしまう。

自分で自分の姿を見失いそうになりながら、僕は歩き続けた。

遠くへ向かって、歩き続けた。

3. 遠くへ続く道
ゆっくりゆっくり歩くふたつの影

右の靴　ねえ、おとうさん。ずいぶん、長いこと歩いてますねえ。私たち。
左の靴　そんな長いか？
右の靴　長いですよ。
右の靴　私ら、どこから歩いて来たんでしょね。
左の靴　そんなん：しらんがな。
右の靴　どこまで、歩いて行くんでしょね？
左の靴　そいつはわかる。捨てられるまでよ。
右の靴　捨てられるんですか。
左の靴　当たり前や。いらんようになったら、捨てられる。
右の靴　捨てられたら：：そのあとは、やっぱり、てんごくへ、行くんでしょか？
左の靴　あほか。わしらはてんごくへは行かん。
右の靴　そうなんですか？なんですか？
左の靴　てんごくというところは：：：：生きとったもんが、死んだときに行く

ところや。わしらは靴やから。靴は生き物やないから、てんごくにはいかんのや。
右の靴　そうですか。靴は、てんごくにはいかんのですか。
左の靴　生き物にはたましいがあつて、てんごくというのは、死んだものたましいが運ばれていくとこなんや。
右の靴　私らには、たましいがないんですか。
左の靴　たましいは、ない。
右の靴　靴やからですか。
左の靴　靴やからや。
右の靴　てんごくはやっぱり天の上にあるんでしょかね？そんなところへいったいどうやって運ばれていくんでしょね？
左の靴　それは：：：てんしや。たましいを運ぶのはてんしや。てんしは空を飛べるからな。
右の靴　ふうん。
左の靴　わしらは、靴やから：：てんごくやのうて焼却場へ行くんや。
右の靴　焼却場へ行ったらその後、どうなるんです？
左の靴　煙になって消えてしまふんや。
右の靴　何も残らんのですか？

左の靴 何も残らん。

右の靴、しばらく考えている

右の靴 おとうさん。

左の靴 なんや？

右の靴 それまでは、いっしょに歩きましょうね。

左の靴 歩いとるやないか。

右の靴 おぼえてますか？初めて会った時のこと。

左の靴 うん。

右の靴 覚えてないのは、ずいぶん、ずいぶん、昔のことだからですよ。

左の靴 そうか。

右の靴 …私は、覚えてますけどね。

少女は、屋上にいる。

空を見上げて黙っている。

そして、靴たちの会話を耳を傾けている。

天使は歩き続けている。

さて。これからどうなるのだろう…

少年は、ふたたび本に目を落とす。

少年 古いつぶれた靴を履いて天使は歩く

地平線を越えてどこまでもどこまでもどこまでも歩く

天使の足音はとて小きくて誰の耳にも届かない

天使の姿ははかなくて誰の目にも映らない

けれどもふと沈黙の中にかすかに響く足音を聞くかもしれない

一瞬だけ踵を翻してかく歩く天使の姿が見えるかもしれない

(本を閉じる)

人々が行き交っている。口々に話しながら。

誰かに話しかけたり、誰にともなく話しかけたり。

時は波のように何度も繰り返している。

道はどこまでも続いている。

ふと、沈黙が訪れる。

少女 あれ？今……（ふと、後ろをふりむく。）
 少年 （振り向いた少女と目が合う）
 少年 （少女に、笑いかけるように）……………今、天使が通った？
 少女 ……（何かをじっと見つめている。）

少年は、本をもとあった場所に再び置き直す。
 そして、小さな灯りを手に、そこから遠ざかる。
 靴を履いていないので、足音は聞こえない。
 だけど、誰かがたしかにこちらに笑いかけ、自分の横を通っていったことを少女は知る。
 そして、それが誰なのか、誰だったのかを。
 少年の手の中の小さな灯りはますます小さくなっていき、やがてここからは見えなくなる。
 遠くへ、行ったのだ。

あの時の恋

登場するもの：男

女

男 こんな手紙が来た。
 「覚えていますか？あなたがあの時手放してしまった、あの恋……
 お預かりしています。どうか引き取りに来て下さい。これが最後のチャンスです。いらっしゃらなければその後自動的に処分されます……」
 差出人の名前はなかった。地図が1枚だけ入っていた。
 何だ？
 あの時の恋……？あの時……？

それは、もしかしたら……。いや……それとも……。いや、それよりも……。いやいや、そんなはずがあるもんか。いたずらに決まってるじゃないか。こんな……。まるでゴミ箱へ放り込もうとした。それでなくても忙しいのに。片づけなければいけない仕事が山のようにある……。こんな……
 ……気が付くと。いつの間にか地図に沿って歩いていて。

不親切な地図だった。ずいぶん遠回りをして、いろんなところを通りぬけて、目的地へおかつて歩いていった。

こんなに速く歩いたのはずいぶんひきしぶりだった。

こんなに回り道をしたのも、ひきしぶりだった。

そもそも、こんな道を、ずいぶん長い間、歩いていなかったような気がした。

会社へ向かう道。

いつも電車に乗っていた駅。

ああ。そうだった。この道には大きな犬がいる

子供達が怖がって避けて通った道だ。

ここは息子の通っていた中学校…

妻が生きていた頃、よく鉢植えを買ってきた花屋だ…

ここは…娘の通っていた高校…いや、私の母校だ。

こんなところにあつたのか。いったい何年ぶりだろう…。

ああこの公園…ここを通って自転車で通っていた…

チリンチリン。自転車の音。

女 あ…。

男 すみません。大丈夫ですか？

女 …痛…。

男 ああ。すみません。起きられますか？

男、自転車を起こす。

女 ええ…すみません。

男 すみません。なんだかぼんやりしてて。

女 いえ。私のほうこそ…。あ。落ちましたよ。これ…

女は地面に落ちた地図を拾い、男に返そうとする…、が…、

女 あ…。

男 え？どうしました？
女 いえ…。
男 何か？
女 あの…この地図…
男 え？

男は手にしていた地図を見る。

女 あの…この辺りの地図でしょうか？
男 あ…ええ。そうですけど…
女 すみません。ちょっと、見せて頂いてもいいでしょうか？
男 は？
女 道に迷ってしまっって。
男 え？
女 あの…ごめんなさい。
男 …。
女 あった…。この通りです。え？！あ…ふたすじ向こうだったんですね…。

男 …。
女 向こうにもおなじような公園があったんですね…。
男 ああ。よく間違えられるみたいです。
女 どうしてですか？
男 は？
女 どうして、そんなそっくりな公園をふたつもつくるんですか？
男 え…さあ…。
女 大きいのをひとつ作ればいいじゃないですか。
男 いや…そうですけど…いや…ふたつあったほうがいいと思ったんでしょう。
女 誰がですか？
男 …さあ。

女は呆然と立っている。

男 あの…
女 約束してたんです。
男 …約束…。

女 それなのに、私…地図をなくしてしまって…
 男 ああ。
 女 間違えて、向こうの公園に行ってしまった…。
 男 ああ。
 女 待ってても誰も来ないからおかしいなと思って…
 男 はあ…。

男 (N) 妙な女に捕まってしまった。速く地図を返してくれ、と思いつつ、女の自転車の籠に目を遣ると、1冊の本が目に入った。

男 その本…
 女 …本？ああ。これですか。
 男 いえ…。あ。
 女 これ…いいですよ。
 男 お好きなんですか？そういう小説…
 女 あら。ご存じなんですか？
 男 …ええ。大好きです。その作家の小説はみんな読んでます。それ、いちばん最初

の作品でしょう。
 女 …あら…。
 男 どうかしました？
 女 …私も、このひとの小説大好きなんです。なかでもこれがいちばん。
 男 ああ。私もです。…あ…
 男、ふと考え込む…。

女 どうしたんですか？
 男 いえ…
 女 何か…？
 男 いや…

男 (N) 昔、その本を誰かに貸したような気がした。ずうっと昔…。
 …そして…

女 あの…
 男 ああ。すみません。待ち合わせは何時ですか？

女 ……
 男 あの…何か？
 女 ……約束はね、昨日だったんです。
 男 昨日…。
 女 私、うっかり地図を失くしてしまって、それで途中で道に迷って…。そしたら向こうに同じような名前の公園があったものですから、つきりそこだと思って…。
 男 ああ。
 女 日が暮れるまで待ってたんです。
 男 ……
 女 でも、会えなかった。
 男 ……こっちの公園だったんですね…。
 女 いえ…でも
 男 でも？
 女 こっちで待ってても、結局会えなかったのかもしれない…。
 男 え？
 女 ……そしたらきつと悲しかった…。だから、間違えて、却ってよかったのかもしれない。

男 ……あの…
 男 (N) ……そう、約束の日。たしかに私はその場所へ行ったのだ。
 彼女は来ていなかった。日が暮れるまで待った。でも、結局現れなかった。
 そしてそれっきり、会うこともなかった。あとで本だけが送られてきた。会って本を返したいというのは口実じゃなかったのだ。もういちど会えるかもしれないと思ったのは、私の勘違いだった…。あのとき、そう思って……そしてそれっきり会うこともなかった。もうずいぶん昔のことだ。いったいあれからどれだけ時間が流れたんだろう…。

男はしばらく考えることをしている

女 ……ですよね？
 男 (はっと我に返る) え？あ…え？
 女 この小説。このまま終わってしまうなんてあんまりです。
 男 え？ああ。そうですね…。
 女 ええ。私はなんか納得がいきません。

男 はあ…
 女 あなたは納得してるんですか？
 男 いや…まあそうですね。ちょっとひどいですよね…
 女 でしょう。このまま終わってしまった…たしかにそれはそれでひとつの結末だと思えますけど…でも…それじゃあおしまいになりません…
 男 はあ。
 女 私は、嫌です…。
 男 はあ…
 女 そう思いませんか？

男 (N) こんな口調で。とうとういつまでも話し続ける女の声を。聞いたことがあ
 るような気がした。思いこみが激しくて。言ってることが矛盾してるのにちっとも自
 分で気が付かなくて。言ってもわからなくて。ちよつと確かめれば分かることをすぐ
 間違えて。そのせいでいろんなことがうまくいかなくて…。そんな様子に腹を立てな
 がら、でもその無茶苦茶な話を聞いているのは実は結構楽しくて…。だけど結局どこか
 で決定的に間違ってしまった。それはきつと、偶然ではなく、至るべくして至った結
 末だったんだと思う…。

だけど、もし。もしももう一度…

女 結末って、どうしてひとつじゃないといけないんでしょうね…
 男 ……ひとつになるまで結末って言わないからじゃないですか？
 女 じゃあ、結末がなければいいんですね。
 男 それは、無理でしょう。
 女 どうしてですか？
 男 小説ですから。
 女 小説の決まりなんですか？
 男 そうです。
 女 どうしてですか？そんなの根拠がないですよ。
 男 あなたの言ってることの方が…(根拠がないでしょう。)

風景が。すこしずつ薄くなっていった。

やがて音も少しづつ遠ざかり。

心地いい空気に包まれて、何もかもが少しずつ、消えていった。

すつかり、何もかもが消えていった。

公園も。自転車も。地図も。本も。そして…

賛美歌が聞こえている…。
教会の中。葬儀が終わった。参列者がひそひそと話をしている…

孫(男) おじいちゃん、眠ったまま逝ったって？

孫(女) うん。

孫(男) 大往生だったね。

孫(女) うん。安らかな…っていうより、なんか楽しそうな顔だったよ。

孫(男) そう。

孫(女) うん…夢見てたんじゃないかな。

孫(男) 夢？

孫(男) ふうん。何の夢だろ。

孫(女) 何の夢だろ。楽しそうな顔だったよ。…まるで、これから、何か始まるみたいなの…。

賛美歌の音、大きくなる。
今朝早く。魂がひとつ。天国へ昇っていた。

ラジオ

登場するもの：男

女

ラジオのチューニング。
きゅーん、きゅるきゅるきゅる…。
電波の乱れる音。耳の痛い雑音。
ときどき断片的に聞こえてくる音や言葉の数々…。
突然だったり、とぎれとぎれだったり、雑音の中に紛れていたり…
やがてチャンネルが合っ。
ひとつづきの言葉が浮きあがってくる。
ときおり、雑音に消されそうになりながら、
でもはつきりと意味を持つ言葉として…。
聞こえてくるのは音楽と、低い、芝居がかったノリのいい、DJの声。
いまいちあか抜けない、古くさい台詞…。

男 あなたは今、どこにいますか？

何をしていますか？

誰と一緒にですか？

そこからは、なにが見えますか？
何が聞こえますか？

電話のベルの鳴る音。いっせいに……。

男　こんばんは。「ミッドナイトコール」の時間です。
今日もたたくさんのお電話がかかってきています。
ラジオの前のみなさん、どうもありがとうございます。さて、今日のお客様は……
男　……おっと。つながりましたね。
女　こんばんは。真夜中のこちら側へようこそ。今夜のゲストはあなたです。
男　……。
女　もしもし。
男　はい。
女　ええっと、お名前を聞いてちゃってもいいかな？
女　やまぐちまさみ。16才。高校2年。神戸市東灘区。クラブは天文部。お父さんは単身赴任中。好きな食べ物はいちごとヨーグルト。

男　……(軽快に笑う) どうもありがとうございます。まさみちゃんは、今、ひとり？
女　はい。
男　こんな時間まで……勉強かな？
女　明日から期末テストだから……
男　えらい！じゃあちよっと息抜きに僕とおしゃべりしてくれるかな。
女　はい。
男　ありがとうございます。さて。それではまさみちゃん。あなたの質問は？
女　どこですか？
男　え？
女　今、どこにいるんですか？
男　何してるんですか？
女　誰と一緒にですか？
男　そこからは、なにが見えますか？
女　……。
男　……。
女　……。
男　……。(笑)

女 ……。

男 いやいやいや。のっけから「ミッドナイトコール」の決め台詞で攻められてしまいました。

女 ……

男 参りました。いつも聞いてくれてるんだ。最初から…。

女 ええ。いつも。

男 ありがとう。嬉しいね。さて。今…。

女 私が聞いてるんです。あなたは誰？いつも誰と話してるの？

男 (笑って)リスナーのみなさんと、真夜中の会話を楽しんでます。今夜はあなたと…。

女 嘘よ。

男 え？

女 やまぐちまさみ。16才。高校2年。神戸市東灘区。クラブは天文部。お父さんは単身赴任中。好きな食べ物はいちごとヨーグルト。…。嘘よ。ぜんぶ。

男 ……

女 昨日、電話したのもわたし。

男 ……

女 おととい、電話したのもわたし。

男 ……

女 その前も。その前も…。

男 ……

女 ……って言ったら、どうする？

男 ……

女 ね。そこからは何も見えないでしょう？何も、わからないでしょう？

男 そう？

女 こっちも。真っ暗で、何も見えない。

誰もない。どこにいるのかわからない。

何も聞こえない。だから私は想像するの。

男 想像？

女 私の知らないところに、いろんな放送局がある。そこではいろんな楽しい番組や音楽が放送されて、私はその中のひとつを選んでチャンネルを合わせる。

男 いいね。

女 番組にはリスナーが電話して話をするのできるコーナーがあるの。

男 ますますいいね。

女 自分で自分のことちょっとかっこいいと思ってる調子のいいディスクジョッキーがいて、マイクに向かって夜通し話したりはがきを読んだり音楽をかけたたりする……の。

男 う〜ん、まあ……いいね。

女 そのDJは、どの電話やがきにも、自分のことのように親身になって話を聞いている……みたいな話すの。

男 うん。

女 私もそこへ電話をかけるの。

男 こんな風にね。

女、しばらく黙っている。

女 そんなことを想像するの。今もしてるの。

男 うん。

女 だから。あなたの番組に他の誰かが電話することなんて、あり得ないのよ。

男、しばらく黙っている。

男 君が、毎日電話してくれてるんだ。

女 ……

男 きのうも、おとといも、その前も、その前も、番組には電話がかかってきて、僕は楽しくおしゃべりをした。

女 ……

男 もうずっと前から僕はここにいて、この番組を続けている。

女 毎日たくさん、電話がかかってくるってほんとに思ってる？

男 思ってるよ。

女 だから……

男 たくさんの電話、たくさんのはがき。でも僕が話すのは一晩にひとりだけ。

女 ……

男 これはそういう番組だから。

女 でも、あなたは……

男 おっと残念。タイムアウト！今日のおしゃべりはここまで。

今夜はありがとう。またあした、みんなからの電話、待ってるよ〜！

電話の切れる音…。
男、一通のはがきをとりあげ、読み始める。

男 えへ。では今夜のメッセージを…。
住所不明、匿名希望さんより。こんばんは。ずっと聞いています。ずっとです。部屋を真っ暗にして、頭からふとんをかぶって、こっそり持ち込んだ小さなラジオで聞いた、あの夜から。たくさんのチャンネルがあって、たくさんのたぐさんの言葉が溢れるようにきこえてきました。誰が誰に宛てて送っているものなのかわかりませんでした。盗み聞きしているような気もしましたが、僕だけに宛てた私信のようないきもしました。自分で自分のことをちょっとかっこいいと思ってる調子のいいデイスクジョッキーがいて、夜通し話したりはがきを読んだり音楽をかけたたりする番組があつて。聞いているうちに、いつの間にか眠ってしまいました。その晩、夢を見ました。今でも、よくその夢を見ます。目の前にはマイクが一本だけ置かれていて、他には何もなくて、他には誰もいなくて、僕はマイクに向かって話し続けています。ちょっとかっこいい、ノリのいい声で。僕は一晚中話し続けます。

あなたは今、どこにいますか？
何をしていますか？
誰と一緒にですか？
そこからは、なにが見えますか？
何が聞こえますか？

電話のベルの音、無数に…。
雑音が交じる…。

男 ……おっと。つながりましたね。

こんばんは。真夜中のこちら側へようこそ。今夜のゲストはあなたです…。

言葉も音も、やがて雑音の中に消えていく

約束

登場するもの：男

女

桜の木の下。ブランコが揺れている。

男 「君は、誰を待ってるの？」

女 さよならの後にそう言っ

て。あなたは去っていきま

した。

地面を覆う白い影が

風にふんわり揺れました。

足音は、少しずつ小さくな

って遠くへ消えていきました。

追いかけることはできませ

ん。だって、ほら。

男 「君は、誰を待ってるの？」

女 だって、ほら。

あの日から。

ここで、あなたを待ってます。

私はここを、離れるわけにはいきませ

ん。だから、あなたが去っていても。

見送ることしかできません。

男 「君は、誰を待ってるの？」

女 あの日はとてもお天気が良くて。

白い枝は、やっぱりふんわりと華やか

で。空はどこまでも遠くまで晴れてい

て…。生暖かい風が、頬をかすめて通

り過ぎていきました。

私は一日中ここに立って。とおりの向こうを見

あなたが来るのを待っていました。
あのとき…
あなたは何を言おうとしたんでしょう…。
私は何を聞くはずだったんでしょう…。

男 「君は、誰を待ってるの？」

女 日が暮れるまで待ちました。
日が暮れてからも待ちました。
次の日も。その次の日も。その次の日も待ちました。
だって、ほら…。
私はここを、離れるわけにはいきません。

男 「君は、誰を待ってるの？」

女 あれから。
春は何回もやってきて。

白い花は何度も散って
だけでもまた同じようにふんわり開いて。
なんどもなんども開いて閉じて。
そのたびに、私はこの木の下で。
何度もあなたと出会いました。

新しいつぼみが開いて、新しい春が来る。
私は一日中ここにいて。とおりの向こうを眺めている。
遠くから、だんだんに足音が近づいて。
目を開けると、あなたがそこに立っている。
あなたは何か言おうとする。
私はそれを聞こうとする。
だけど、生ぬるい風はあんまりに綺麗に透き通っていて。
肝心なことをすっかり忘れてしまう…。

風が吹く。
桜の花びらが散る。

女 風はやがて白く濁って、

開いたつぼみを枝の端からもぎ取って、
遠くへ静かに去っていく。

…そして私は思い出す。

男 「君は、誰を待ってるの？」

女 …あなたの声で我に返る。

肝心なことを思い出す。

ここであなたを待たなくちゃ。

私はあなたを待ってます。

だって、ほら…あの日から。

男 「君は、誰を待ってるの？」

女 さよならの後にそう言って。

あなたは遠くへ去っていく。

地面を覆う白い影をざくざくと踏みしめて。

足音は、少しずつ小さくなって

遠くへ静かに消えていく。

追いかけることはできません。

だって、ほら。

私はここを、離れるわけにはいかないから。

男 「君は誰を待ってるの？」

女 私はここを、離れるわけにはいきません。

何度目の春が来ても。風がすっかり通り過ぎてても。

いつまでも…。

何度でも、さよをならを言いましょう。

肝心なことを忘れないために。

だってほら、……………約束したから。

女 さよなら。

…今年も、白いつぼみが開きました。

風の中。ブランコが揺れている。

靴 2002

登場するもの：男

女

夏の終わり。
誰もいない海…のはずが、波打ち際に女がひとり座っている。

片手には、靴。片方だけの靴…。

女 (振り向いて) 誰?

男 いや…。

女 知らないの? 今年はまだ泳げないのよ。だって…

男 知ってる。

女 何してるの?

男 泳ぎに来たわけじゃない。

女 そうみたいね。

男 君は……
女 私も。
男 え？
女 泳ぎに来たわけじゃない。

波の音

女 何見てるの？
男 いや……
女 この靴？
男 どうしたの？その靴……？
女 おかしい？
男 いや……
女 私が、靴を、持ってるのが、おかしい？
男 いや……そうじゃない。
女 そうじゃない。
男 ほんとに。そうじゃなくて、どうして、片方だけ持ってるの？

女 かたほう。
男 もう片方は……どうしたのかなと思って……
女 ふたつあればいいのね。
男 あ……。
女 ここにあるのはひとつだけ。かたほう。
男 ……流れちゃったの？
女 何が？
男 だから……その、もう片方の、靴……。
女 ……
男 それとも……流れてきたの？片方だけ……。

波の音

女 そんなことわからない。(困っている)
男 え？
女 でも、どっちかなのね。
男 ……

女 かたほうだけ流れていっちゃたのか。
かたほうだけ流れてきたのか。
男 ……。
女 つまり、どっちかなのね。この靴は。足りないのか。余ってるのか。

ちやぶちやぶ。海をかきませる音。

男 (話題を変えてみたりして) 何してるの?ここで?

女はまたこちらを振り返る。

女 (笑っている)
男 何?
女 泳げない海なのに。
男 ?
女 いろんなひとに、会うのよ。ここで。(不思議そうに)
男 ……

女 失くしたものを探しに来るひと。
失くせないものを捨てに来るひと。
男 ……
女 だけど結局なんにもしないで帰っていく。
男 ……
女 しょうがないよね。海は泳ぐところだから。
(男に) 今年はもう、泳げないのよ。
男 ……
男 ……知ってるよ。

男 彼女はそのまま、僕に背を向けて、さっきまでと同じように遠くへ目をやった。
そしてもう、振り返らなかった。

暑かった一日の向こうに、大きな太陽が沈み込もうとしていた。

波の上で揺れる彼女の腰から下は、光る鱗に包まれた魚のしっぽの形をしている。
もし、ひとそろいの靴を持っていたとしても、彼女はその靴を履くことはないだ
ろう。だけど、かたほうの靴さえ持っていなかったとしても、

彼女は自分の靴を手に入れるためにいつまでもここで待ち続けるかもしれない。

女 こんなところにあると助かるでしょ。
男 ……助かった…。

女、手を出す。

男 ああ…。(ポケットからコインを取り出し、窓越しに女に渡す)
女 毎度あり。じゃ、入れるよお。

(ぶしゅーっ、どくどくどく。ガソリンを注ぎ込む。)

男 こんなところに給油所があるなんて聞いてない…

女 特に宣伝もしてないしね。

男 いや…。

女 先長いんだからさ、途中で給油しなくちゃ国境を越えられない。

男 あとどれくらい？

女 あんたが来たのと同じだけ。ここがちょうど真ん中だから。

男 そうか…。じゃあ、全然足りなかったな。万全だと思ったのに…。

女 道の長さがわからないのに、なんでガソリンの量がわかんよ。

男 あるだけ全部入れてきたんだ。

女 どれだけ持ってきたって一緒よ。たくさん積んだらそれだけ燃費悪くなるんだから。

男 ……

女 要るだけ全部持つて出るなんて無理よ。そういう発想は不経済です。

男 不経済…。(呆然)…。(気を取り直し、) 商売は…繁盛してる？

女 最近は大メね。

男 もう誰も通らないのかと思ってた…。

男 あっちからも？

女 あっちからもこっちからも。

男 そうか…。それは、

女 でも、あんたが通ったって事は…、

男 (何か言いかけるが遮られる)

女 理由は知らない。どっちの国からも遠すぎて。ここまでは何にも聞こえてこない。

男 君は、どっちの国から？

女 覚えてない。

男 …え…

女 お客さん、(車が来た方向を指して) あっちの国のひと？

男 いや。

女 じゃあ、(車が向かう方を指して) 国へ帰るんだ。

男 ああ。君は…、ずっと帰らないの？

女 どこへ帰るのよ？

男 そうか…。(何か、考えている) じゃあ、ずっとここに？

女 さあ。飽きたらどっか行くかも。思い出したら帰るかも。

男 思い出したら、帰るのか？

女 え？

男 帰るところがあつたら、帰ることも帰らないこともできる…。

女 帰ることと帰らないことしかできないの？

男 ……。

女 ……で、あんたは、帰るんだ。

男 うん。

給油が終わる。

女 あいよ。これで、国境を越えられる。

男 ……乗せてってやるうか？

女 だから、荷物増えると燃費悪くなるって。人の話聞ってる？

男 この先、給油所は？

女 知らない。あつたとしても、そこにもまた誰がいるわよ。

男 ……。

女 さっさと行きな。こっから先も、長いんだからさ。

男、何かいいかけるが、女はもう聞いていない。
女は勢いよく、タンクの蓋を閉める。

男、腑に落ちないまま、車を走らせる。
やがて地平線の向こう側へ消えていく。
これまでの車が皆、そうだったように…。
女はそれを見送っている。
これまでずっと、そうしてきたように…。

短編集 5 ガソリン

二〇一六年一月七日初版第一刷行

著者 久野那美

発行者 久野那美

nami.sparrow@gmail.com

※上演に関するお問い合わせは右記まで。